



>> 愛媛大学 - Ehime University

Title	幼児の仲間関係に関する研究 : 仲間相互作用の行動観察分析
Author(s)	前田, 健一; 泉, あかね
Citation	愛媛大学教育学部紀要. 第I部, 教育科学. vol.40, no.2, p.45-55
Issue Date	1994-02-28
URL	http://iyokan.lib.ehime-u.ac.jp/dspace/handle/iyokan/2522
Rights	
Note	

This document is downloaded at: 2017-10-15 14:39:58

幼児の仲間関係に関する研究

—— 仲間相互作用の行動観察分析 ——

前 田 健 一 ・ 泉 あかね

(幼児心理研究室)

(愛媛大学大学院教育学研究科)

(平成5年10月11日受理)

子どもの仲間関係に関する研究は、仲間関係に問題をもつ子どもを識別し、彼らと他の子どもたちが認知的・行動的・情緒的レベルにおいて異なる特徴を示すことを明らかにしてきた(Asher & Coie, 1990; Hymel & Rubin, 1985; Newcomb, Bukowski & Pattee, 1993)。これらの研究は、主要な情報源として仲間や教師による様々なアセスメント情報、子ども自身の自己報告や面接調査情報、子ども同士の仲間相互作用を直接観察する行動観察情報などを利用している。本研究では、仲間情報の1つであるソシオメトリック測度と行動観察測度との関連を検討する。

子どもの仲間相互作用を自然場面で観察することは、他の方法よりも優れたいくつかの利点をもっている。第1に、行動観察は仲間関係に関するアセスメントの中でも最も表面的妥当性の高い方法であると考えられる(LaGreca & Stark, 1986; Hymel & Rubin, 1985)。つまり、行動観察データは、子ども間で行われている実際のやりとりについて客観的な情報を提供するので、教師評定や親報告測度などに内在する判断バイアスや主観性を最小限に抑えることができる。しかも、対人行動と仲間の応答との関係を具体的に明らかにできる。第2に、行動観察は介入指導を必要とする子どもを識別したり、社会的スキル訓練の標的行動を決定するのに役立つ。また、行動観察測度は社会的スキル訓練の介入効果を最も敏感にとらえる測度である(Gresham & Nagle, 1980; 佐藤・佐藤・高山, 1993a, 1993b; 前田・高橋, 1993)。

このように行動観察測度は子どもの仲間関係をとらえる有力な測度であるにもかかわらず、従来の研究ではそれほど広く使用されてこなかった。Hymel & Rubin(1985)は、その理由として次の4点を挙げている。第1に、行動観察データの収集には時間、労力、経費を要する。ソシオメトリック測度のような仲間情報や社会的行動に関する教師評定は短時間に一斉に収集できる。それに対して、観察データの収集には数週間から数か月を要する。第2に、子どもの発達につれて、仲間相互作用の観察は次第に難しくなる。保育園や幼稚園では自由遊び時間を利用して仲間相互作用を観察できるが、小学生以降になると授業時間中は自由な仲間相互作用が生じにくいので、わずかな休憩時間や放課後の自由時間を観察することになる。第3に、子どもの発達につれて、外部者から容易に観察されないような行動が仲間関係を決定する重要な行動となってくる。第4に、子どもたちが観察されていることを意識して、自然な日常的行動を示さない可能性がある。例えば、攻撃行動のような否定的行動を抑制したり、向社会的行動のような肯定的行動をわざと多く実行するかもしれない。確かに、行動観察に伴うこれらの問題は観察研究の発展を阻害する重要な要因であるが、克服できない問題ではないし、基本的に行動観察の利点を損なうものでもない。

例えば、第2と第3の問題は、少なくとも保育園児や幼稚園児の場合にはそれほど問題にならない。幼児の言語報告能力の限界を考慮すれば、行動観察の方がむしろ有効な方法であるといえる。第4の問題は、観察者の存在に慣れさせ、観察者を意識しない段階に達してから観察データを収集するなどの工夫で改善できよう。

幼児の仲間相互作用の観察研究では、仲間内地位測度として肯定的指名得点しか使用していないものが多い。例えば、Krantz(1982)はParten(1932)の尺度を使用して、幼児の社会的参加度を調べ、肯定的指名得点との間に $r = .29$ の正相関を見いだしている。同様に、Quay & Jarrett(1984)は肯定的指名率(%)と肯定的相互作用の頻度との間に $r = .26$ の正相関を見いだしている。Greenwood, Walker, Todd, & Hops(1979)は課題作業場面と自由遊び場面に分けて観察し、肯定的相互作用率と肯定的指名得点との間にSpearman順位相関係数 $Rho = .29 \sim .39$ を見いだしている。これらの研究は、仲間相互作用の多い幼児ほど仲間から好かれることを示唆している。しかし、いずれの研究も仲間相互作用という全体的な1つの観察カテゴリーで分析したものであり、どのような相互作用のタイプが仲間内地位測度と最も関連するのかを明らかにしていない。

Hartup, Glazer, & Charlesworth(1967)の研究は、仲間内地位測度として肯定的指名得点と否定的指名得点の両方を使用し、それぞれと幼児の行動タイプとの関連を検討した最初の研究である。この研究では、仲間に対する肯定的行動と否定的行動を観察している。それによると、肯定的指名得点は肯定的行動と有意な正相関($r = .61 \sim r = .70$)を示したが、否定的行動とは有意な相関を示さなかった($r = .00 \sim r = .18$)。それに対して、否定的指名得点は否定的行動と有意な正相関($r = .28 \sim r = .80$)を示したが、肯定的行動とは有意な相関を示さなかった($r = -.17 \sim r = .13$)。Vaughn & Waters(1981)は16種類の観察カテゴリーを使用し、各カテゴリー測度と一対比較法による肯定的指名得点や否定的指名得点との関連を検討している。その結果、肯定的指名得点は仲間遊び($r = .70, p < .01$)、会話($r = .51, p < .05$)、平行遊び($r = .67, p < .01$)のそれぞれと有意な正相関を示した。否定的指名得点は「いじめる・からかう」行動($r = .57, p < .01$)、敵対行動($r = .69, p < .01$)と有意な正相関を示した。Masters & Furman(1981)は対象児から仲間への行動と対象児が仲間から受けた行動を区別している。それによると、肯定的指名得点は肯定的行動を仲間を与える場合($r = .29$)や仲間から肯定的行動を受ける場合($r = .28$)と有意な正相関を示した。それに対して、否定的指名得点は否定的行動を仲間を与える場合($r = .34$)や仲間から否定的行動を受ける場合($r = .41$)と有意な正相関を示した。またGoldman, Corsini, & deUrioste(1980)も肯定的な仲間相互作用をする幼児ほど肯定的指名得点が高い($r = .52, p < .01$)ことを報告している。さらに、この研究では一人遊びをする比率や大人とかかわる比率(%)が肯定的指名得点(順に $r = -.50, p < .01; r = -.36, p < .05$)やソシオメトリック評定法に基づく仲間受容度(順に $r = -.34, p < .05; r = -.35, p < .05$)と有意な負相関を示すことを見いだしている。これら4つの研究から、仲間から好かれ受容される幼児ほど肯定的行動を示し、仲間遊びも多いのに対して、仲間から拒否される幼児ほど否定的行動を示し、一人遊びや大人との接触が多いと示唆される。

仲間アセスメントや教師アセスメントを使用した研究によると、協調的・向社会的な行動をする子どもは仲間から人気があり、攻撃的な行動をする子どもは仲間から拒否されやすいと指摘されている。また、仲間との相互作用が少なく、引っ込み思案で一人遊びの多い子どもは仲間から無視されやすく、孤立しやすくと報告されている(Hymel & Rubin, 1985; 前田・片岡, 1993)。行

動観察測度を使用した研究は少ないけれども、これらのアセスメント研究結果と対応した結果を提供している。しかし、行動観察測度を使用した幼児の研究では、二次元分類システム(Newcomb, et al., 1993を参照)を使用して人気児、拒否児、無視児などの地位群の行動特徴を直接比較していない。肯定的指名得点や否定的指名得点との相関分析だけでは、拒否児群と無視児群の行動特徴を明らかにできない。そこで本研究では、写真ソシオメトリック指名法の結果に二次元分類システムを適用して人気児、拒否児、平均児、無視児の4地位群を分類し、これらの地位群間で実際の仲間相互作用の仕方にどのような特徴差が見られるかを比較検討することにした。本研究の主な目的は、自由遊び場面における幼児の仲間相互作用をビデオ集録し、行動観察測度の比較分析を通して次の予想を検証することである。(1)仲間から受容される人気児は、仲間相互作用の中で協調的・向社会的に行動する傾向にあるだろう。(2)それに対して、仲間受容の低い拒否児は否定的・攻撃的に行動する傾向にあるだろう。(3)無視児は仲間相互作用の全体量が少なく、一人遊びが多いだろう。

方 法

対象児 対象児は松山市内にある公立保育園の5歳児クラスの幼児27名であった。男女の内訳は表1に示すとおりである。彼らの平均年齢と年齢範囲は5歳8か月(5歳2か月～6歳1か月)であった。

表1 対象児の内訳と分類基準(1回目+2回目ソシオ)

地位群	分類基準	男	女	全体	
人気児	$SP > 1, L > 0, D < 0$	2	6	8	
拒否児	$SP < -1, L < 0, D > 0$	2	4	6	
平均児	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	2	3	5	
無視児	$SI < -1, L < 0, D < 0$	1	5	6	
両論児	$SI > 1, L > 0, D > 0$	2	0	2	
		計	9	18	27

実施時期 1回目の写真ソシオメトリックテストは1992年5月29日～6月1日に、2回目の写真ソシオメトリックテストは1992年7月14日～7月17日にかけて実施した。行動観察は1992年4月～6月の約3か月にわたって行った。

材料 個別写真カード：写真ソシオメトリック指名法と評定法では、各幼児のカラー写真カードを使用した。写真は各幼児が一人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5.5cm×横4.5cmの大きさにプリントしたものであった。各幼児の写真を1枚ずつ縦7cm×横5cmの白色厚紙に貼りつけて、個別の写真カードを作成した。この他に、写真ソシオメトリック評定法では3つの分類箱を用意し、仲間の個別写真カードを分類させた。各箱は白色厚紙を用いて作成され、底面積が縦12cm×横12cm、3つの側面の高さが5cm、残り1側面の高さが12cmであった。各箱の高さ12cmの内側面には、それぞれ3色の色画用紙に描かれたハッピーな顔(ピンク色)、ニュートラルな顔(黄色)、悲しそうな顔(青色)の表情略線画を貼りつけてあった。

手続き (1)写真ソシオメトリック指名法：対象児を一人ずつ別室に連れてきて、個別に実施した。最初に厚紙で作成したバスを取り出し、それぞれの座席に各対象児と同一クラスの仲間全員の写真カードをランダムに差し込んで提示した。そして「みんながバスに乗ってやって来た」と

話した。バスは調査に対する幼児の興味を喚起する目的で使用された。この後、仲間の写真カードを1枚ずつバスから取り外し、その写真カードを対象児に見せながら、その写真の仲間名を尋ね、仲間の名前と写真を一致させ得るか否かを確認した。この結果、ほとんどの幼児が仲間全員の名前を言えた。次に、対象児を除くクラス全員の写真カードを床上にランダム配列し、次の教示を与えて肯定的指名を3名まで選ばせた。「この中で、〇〇ちゃん（対象児の名前）が保育園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたい人は誰ですか」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名まで選ばせた。「今度は、この中から〇〇ちゃんが保育園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたくない子は誰ですか」

(2)写真ソシオメトリック評定法：まず床上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て、右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が分類しやすいと考え、どの対象児にも箱の提示位置を一定にした。対象児を除く仲間全員の写真カードをランダムな順に束ねた後、次の教示を与えて写真カードを1枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は△△組（対象児の組名）のお友達の写真を1枚ずつ〇〇ちゃんに渡します。〇〇ちゃんは、写真のお友達をよく見て、〇〇ちゃんが保育園で一緒に遊びたい子だなあとと思ったら、この箱（ハッピーな顔の箱）に入れて下さい。遊びたくない子だなあとと思ったら、この箱（悲しそうな顔の箱）に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないかわからないなあとと思ったら、この箱（ニュートラルな顔の箱）に入れて下さい。それでは、この写真の子はどの箱に入れますか」

(3)行動観察：保育園の自由遊び時間中に対象児1人当たり1回5分間の観察とビデオ撮影を行った。27名の対象児について順に1回目の観察とビデオ撮影を終了した後で、27名について順に2回目の観察とビデオ撮影を開始するという順序で、4回ずつ実施した。したがって、対象児1人当たり合計20分間のビデオ記録を集録した。ビデオ撮影にあたっては、室内と園庭の活動を均等に記録するように注意した。また対象児だけでなく、その周辺の幼児を含めて撮影した。それと同時に、観察記録者1名が対象児の近くで、対象児の会話や表情などを観察し記録した。

得点化の方法 (1)ソシオメトリック指名法の得点：対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。その後1回目と2回目の肯定的指名数同士または否定的指名数同士を加算した。これらの加算した肯定的指名数と否定的指名数について、本人を除くクラスの仲間数で除算し、仲間1人当たりの指名数を算出した。その後、クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点に変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表す。SP得点とSI得点はそれぞれL得点とD得点の合成得点である。SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差を表し、SI得点は好かれる程度または拒否される程度にかかわらず仲間への影響力が強いことを表す。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：対象児ごとに、仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルな顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。この後、1回目の合計得点と2回目の合計得点を加算し、それを評定した仲間数の合計で除算し、平均評定値を算出した。この平均評定値は仲間からの受容度を表す一次元的な指標と考えられている。

(3)行動観察測度：ビデオ録画を分析するにあたって、各対象児の行動および各対象児に対する

仲間の行動を34の行動カテゴリーに分類し、パソコンで整理集計した。表2は、その一部を示したものである。表2には示していないが、対象児からの働きかけ6カテゴリーと応答7カテゴリーと同様に、仲間からの働きかけ6カテゴリーと仲間の応答7カテゴリーも用意した。また表2では、「次の遊びの準備・移動」(カテゴリー33)とビデオ意識(カテゴリー34)も示していない。ビデオ録画を再生しながら、各対象児が関与する仲間相互作用を各行動カテゴリーに分類し、行動カテゴリーごとに反応時間(秒)と反応回数を集計した。反応回数は各行動の持続時間の長短に関係なく、1つのまとまりを成す行動を1回として数えた。

表2 行動観察カテゴリーの一部と各カテゴリーの行動例

-
- (1)対象児から仲間への働きかけ
1. 肯定的な働きかけ(言語的): 仲間の注意を引く。仲間に質問する。仲間をリードする。仲間への好意を言語的に示す。仲間に援助や分与を申し出る。仲間に援助や分与を求める。仲間に同意を求める。
 2. 否定的な働きかけ(言語的): 仲間に敵意や抗議を言語的に示す。攻撃する。命令する。批判する。
 3. ニュートラルな働きかけ(言語的): 仲間への働きかけで肯定的および否定的以外の言語的行動。
 4. 肯定的な働きかけ(身体的): 身体的に仲間に好意を示す。微笑む。笑う。手伝う。協力をする。
 5. 否定的な働きかけ(身体的): 仲間に敵意や攻撃を身体的に示す。叩く。突き放す。破壊的行動。邪魔をする。
 6. ニュートラルな働きかけ(身体的): 仲間への働きかけで肯定的および否定的以外の身体的行動。仲間の後をついていく。
- (2)仲間の反応に対する対象児の応答
7. 肯定的応答(言語的): 仲間に同意する。肯定的コメントをする。
 8. 否定的応答(言語的): 仲間に反対意見をいう。拒否する。否定的コメントをする。
 9. ニュートラルな応答(言語的): 自分の意志を明確にしない曖昧な言語的応答。別の会話をする。
 10. 肯定的応答(身体的): 仲間の行動に同調した行動をする。物を渡したり貸す。うなずく。
 11. 否定的応答(身体的): 首を振る。物を取り上げる。叩く。別の所へ去る。仲間と同調しない応答行動。
 12. ニュートラルな応答(身体的): 自分の意志を明確にしない曖昧な身体的応答。
 13. 応答なし: 仲間の働きかけを無視する。応答しない。
- (5)活動の種類
27. 仲間遊び: 仲間とかかかって一緒に遊ぶ。
 28. 平行遊び: 仲間の近くで類似した遊びをするが、仲間と直接かかわりがない。
 29. 一人遊び(従事): 一人で何かに熱中して遊んでいる。
 30. 一人遊び(非従事): 一人で何かに熱中して遊んでいるわけでもなく、注意散漫にぶらぶらしている。
 31. 傍観的行動: 遊んでいる仲間の近くで関心を持ってその様子を見ているが、活動には参加しないし、遊んでもいない。
 32. 大人との接触: 保母や観察者とかかわる。
-

地位群の分類方法 Coie & Dodge (1988) の分類方法に従った。1回目と2回目の合計得点から算出された写真ソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点に基づいて、表1の分類基準を適用し各地位群を分類した。表1は、その結果分類された各地位群の人数内訳を示したものである。人気児は多くの仲間から好かれ、拒否されることの少ない幼児たちである。

拒否児は人気児と反対の傾向を示し、多くの仲間から拒否されやすい幼児たちである。平均児は好かれる程度も拒否される程度も平均的な幼児たちである。無視児は好かれることも拒否されることも少ない幼児たちである。なお両論児はL得点とD得点の両方とも高い値を示し、ある仲間からは好かれるが別の仲間からは拒否される幼児たちである。両論児は2名しかいなかったので、地位群間比較の分析から除外した。

結 果

観察測度の地位群間比較

(1)反応時間：34の行動カテゴリーごとに反応時間(秒)を集計したが、いくつかのカテゴリーでは反応時間が非常に少なかった。そこで、表2のカテゴリーから、同一カテゴリーの(言語的)と(身体的)を加算して合成カテゴリーを作成した。さらに、これらの合成カテゴリーに基づいて反応時間を求め、各幼児の全観察時間に占める各反応時間の比率(%)を算出した。表3の()外の数値は、合成カテゴリー別に人気児、拒否児、平均児、無視児の4群別に反応時間の比率(%)を示したものである。合成カテゴリー別に、各対象児の反応時間の比率(%)を角変換した値に基づいて、4群間の平均値を比較したところ、「対象児から仲間への働きかけ」の「肯定的」において地位群の主効果が $F(3,21)=3.86, p<.05$ で有意となった。ダンカン法による多重比較の結果、人気児>平均児≠拒否児(いずれも $p<.05$)であったが、他の群間には有意差が

表3 反応時間の%(反応回数)の地位群別平均値

観 察 測 度	人気児 (N=8)	拒否児 (N=6)	平均児 (N=5)	無視児 (N=6)
(1)対象児から仲間への働きかけ				
肯定的	13.30(27.63)	4.88(17.33)	5.60(21.00)	8.39(23.67)
否定的	1.65(3.63)	1.54(3.17)	1.01(4.80)	2.04(6.83)
ニュートラル	0.89(3.50)	0.67(1.33)	1.12(4.60)	0.71(1.17)
(2)仲間の反応に対する対象児の応答				
肯定的	3.41(11.13)	2.04(8.33)	3.60(16.00)	2.75(13.00)
否定的	1.21(2.88)	0.87(3.33)	1.36(5.00)	0.97(4.83)
ニュートラル	0.27(1.50)	0.19(0.83)	0.37(1.80)	0.06(0.50)
(3)仲間から対象児への働きかけ				
肯定的	3.70(11.38)	2.59(8.50)	4.29(18.40)	4.09(14.50)
否定的	0.76(2.88)	1.00(3.83)	0.69(3.40)	0.54(2.50)
ニュートラル	0.31(1.00)	0.39(1.33)	0.43(0.60)	0.21(1.17)
(4)対象児の反応に対する仲間の応答				
肯定的	5.84(17.25)	2.52(9.50)	3.45(14.80)	4.51(17.50)
否定的	1.34(4.25)	3.57(6.50)	1.33(4.00)	1.03(4.50)
ニュートラル	0.47(1.63)	0.21(0.50)	0.09(1.20)	0.24(0.83)
(5)活動種類別の活動時間				
仲間遊び	63.69	37.94	57.01	48.71
平行遊び	2.93	14.22	4.50	6.48
一人遊び(従事)	22.39	34.51	22.78	20.18
一人遊び(非従事)	1.97	1.50	3.56	10.55
傍観的行動	4.68	3.12	2.46	8.94
大人との接触	3.65	7.56	3.19	1.78

なかった。次に、活動時間では「仲間遊び」で地位群の主効果が $F(3,21)=2.61, p<.10$ で有意傾向を示した。念のため多重比較をしたところ、人気児>拒否児の傾向にあった。「平行遊び」でも地位群の主効果が $F(3,21)=2.52, p<.10$ で有意傾向を示し、拒否児>人気児の傾向にあった。「一人遊び(非従事)」では地位群の主効果が $F(3,21)=9.10, p<.001$ で有意となった。多重比較の結果、無視児>平均児≒人気児≒拒否児(無>平は $p<.05$ で他の有意差は $p<.01$)であった。

(2)反応回数：表3の()内の数値は地位群別・合成カテゴリー別に反応回数の平均値を示したものである。反応回数については、そのまま地位群別・カテゴリー別に平均回数を算出し、4群間で比較した。その結果、「対象児から仲間への働きかけ」の「ニュートラル」で人気児>無視児の傾向($p<.10$)が見られた以外、いずれのカテゴリーでも群間差は有意でなかった。

相関係数

(1)地位得点と反応時間の相関係数：表4の()外の数値は地位得点の指標としてソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点および評定法の平均評定値を使用し、これらの得点と反応時間(%)の角変換値との積率相関係数をまとめたものである。表4から、「対象児から仲間への働きかけ」の「肯定的」はL得点、SP得点および平均評定値と正相関を示し、D得点と負相関を示していた。仲間から好かれ受容されている幼児ほど、仲間に対して肯定的な働きかけを多く行っていることが分かる。また「仲間の反応に対する対象児の応答」の「否定的」と「対象児の反応に対する仲間の応答」の「ニュートラル」がL得点と有意な正相関を示した。全般にL得点は肯定的働きかけや応答だけでなく、否定的およびニュートラルな働きかけや応答と

表4 仲間内地位得点と反応時間(反応回数)との相関係数

観 察 測 度	L得点	D得点	SP得点	SI得点	平均評定値
(1)対象児から仲間への働きかけ					
肯定的	.34+(.34+)	-.35+(-.27)	.40*(.36+)	-.01(.07)	.49**(.47*)
否定的	.13(.13)	.14(.17)	-.01(-.02)	.26(.29)	-.01(-.04)
ニュートラル	.21(.33+)	.13(-.12)	.05(.27)	.32(.20)	.07(.18)
(2)仲間の反応に対する対象児の応答					
肯定的	.19(.02)	-.19(-.09)	.22(.06)	.00(-.07)	.18(.13)
否定的	.39*(.18)	-.01(.06)	.24(.07)	.36+ (.22)	.14(.04)
ニュートラル	.19(.20)	-.19(-.27)	.23(.28)	.00(-.07)	.17(.21)
(3)仲間から対象児への働きかけ					
肯定的	.23(.13)	-.29(-.11)	.30(.14)	-.05(.02)	.32(.19)
否定的	.14(.23)	-.08(-.04)	.13(.16)	.07(.18)	.06(.13)
ニュートラル	.26(.26)	-.01(.02)	.16(.14)	.24(.27)	.05(.06)
(4)対象児の反応に対する仲間の応答					
肯定的	.25(.19)	-.18(-.13)	.25(.19)	.07(.06)	.42*(.35+)
否定的	.12(.09)	.15(.01)	-.02(.05)	.25(.09)	.00(.04)
ニュートラル	.47*(.46*)	-.12(-.04)	.35+ (.29)	.33+ (.39*)	.24(.16)
(5)活動種類別の活動時間					
仲間遊び	.52**	-.56**	.64**	-.03	.57**
平行遊び	-.47*	.33+	-.48*	-.13	-.51**
一人遊び(従事)	-.16	.52**	-.40*	.34+	-.46*
一人遊び(非従事)	-.33+	-.26	-.05	-.55**	.11
傍観的行動	-.42*	-.27	-.09	-.64**	.00
大人との接触	-.07	.43*	-.30	.34	-.23

N=27 + : $p<.10$ * : $p<.05$ ** : $p<.01$

も正相関の関係パターンを示している。このことから、仲間から好かれている幼児ほど、肯定的・否定的に関係なく、全般に仲間とかかわる時間が多いといえる。この点は活動時間と地位得点との相関係数からも裏付けられる。L得点は「仲間遊び」と有意な正相関を示すが、「平行遊び」、「一人遊び（非従事）」、「傍観的行動」と負相関を示した。それに対して、D得点は「仲間遊び」と有意な負相関を示し、「一人遊び（従事）」、「大人との接触」と有意な正相関を示した。仲間から嫌われる幼児ほど、仲間との相互作用が少なく、それに代わって一人遊びや大人とかかわる時間が多くなるといえる。興味深いのは、「一人遊び（非従事）」と「傍観的行動」はL得点ともD得点とも負相関の関係にあることである。これらの行動を示す幼児は仲間から積極的に好かれることも少ないが、だからといって積極的に拒否されているわけでもないことを示唆している。おそらく、これらの行動は仲間相互作用とは無縁の孤立行動であるからであろう。

(2)地位得点と反応回数の相関係数：表4の()内の数値は地位得点と反応回数との相関係数を示したものである。反応時間と見比べると、反応回数の方がいくぶん相関値は小さいけれども、相関パターンは反応時間と類似している。

考 察

本研究では時間測度と回数測度を使用して、従来の研究と同様に相関分析を行うと共に、新たに4つの仲間内地位群を比較した。表4から分かるように、相関値の大きさはいずれも小さかったが、相関分析の結果は従来の研究結果(Goldman, Corsini, & deUrioste, 1980; Masters & Furman, 1981; Vaughn & Waters, 1981)と全般的に一致する傾向を示した。そこで、以下では主に地位群間比較の結果を中心に考察する。まず時間測度では仲間への肯定的働きかけにおいて、人気児群が平均児群や拒否児群よりも有意に多かった。また、人気児群は4群中で仲間遊びが最も多く、平行遊びが最も少なかった。これらの結果は、本研究の予想(1)を支持している。本研究では仲間遊びの時間は平行遊びの時間と有意な負相関($r = -.55, df = 25, p < .01$)、一人遊び(従事)の時間と有意な負相関($r = -.76, df = 25, p < .01$)を示した。このことから、人気児群は仲間と協調的に遊ぶので、その分だけ平行遊びや一人遊びの時間が減少すると示唆される。仲間への肯定的働きかけの回数測度でも、群間差は統計的に有意に達しなかったが、人気児群は4群中最も多い傾向を示した。これらの結果から、人気児群は協調的・向社会的な対人行動を示すので、仲間から受容され仲間と一緒に遊ぶことが多くなると考えられる。

それに対して、本研究では拒否児群が否定的・攻撃的な行動を示しやすいという予想(2)を確証できなかった。確かに、仲間への肯定的な働きかけでは拒否児群が4群中最も少なかったが、平均児群と差がなかった。また表3から分かるように、仲間への否定的働きかけでは拒否児群は4群中第3位であり、仲間への否定的応答では4群中最も少なかった。統計的に有意な結果ではないが、これらの結果は拒否児群といえども、否定的・攻撃的行動がそれほど多くないことを示唆している。しかし興味深いことに、拒否児群は仲間からの否定的働きかけと仲間からの否定的応答を最も多く受けている。さらに、拒否児群は4群中で仲間遊びが最も少なく、平行遊び、一人遊び(従事)および大人との接触が最も多かった。これらの結果から、拒否児群は仲間から受容されず、仲間遊びに参加しようとしても仲間から否定的な反応を受けやすく、結果的に平行遊びや一人遊びを行ったり、大人とかかわることになると示唆される。このように本研究の結果は、拒否児群の置かれている集団内地位を観察測度の側面から裏付けるものであったが、その原

困行動を具体的に明らかにできなかった。これには、いくつかの理由が考えられる。第1に、本研究では反応時間と反応回数の大部分が肯定的カテゴリーに分類され、否定的カテゴリーに分類されることは極めて少なかった。しかも各群の人数が少なく、群内の分散も比較的大きかったので、否定的行動のカテゴリーでは明確な群間差が生じなかったのかもしれない。この点については、各群の人数を増やした観察研究で再検討すると同時に、本研究結果の一般性についても確認する必要がある。第2に、本研究のような行動の量的次元では差がなくても質的次元から見直すと、拒否児群の中には仲間関係に決定的な影響力を与えるような否定的・攻撃的行動を示している子どもがいるのかもしれない。例えば、仲間とのけんかやトラブルは頻繁に生じたり長時間持続するものではないが、その性質や強度が仲間関係に重要な影響を及ぼすと考えられる。本研究では異なる視点に基づいて時間測度と回数測度を設けたが、結果的に両測度は類似した側面をとらえていた。表3の観察カテゴリー別に時間測度と回数測度との相関係数を算出したところ、 $r = .65 \sim r = .93$ の範囲にわたり、その平均値は $r = .80$ であった。本研究のように一定の観察時間を設定して、その範囲で否定的行動を分析すると、一時的で質的な否定的行動や攻撃的行動を十分にとらえることができないのかもしれない。今後の研究では、特定の仲間相互作用（例えば、けんか）だけに的を絞って観察を継続するとか、もっと多様な場面で長期間の観察を実施するなど工夫が必要である。それと同時に、時間や回数のような量的測度だけでなく、否定的相互作用の性質や強度をとらえる評価尺度などを導入して質的分析を行う必要がある。

無視児群は、特に何をしているわけでもない一人遊び（非従事）の時間が4群中最も多かった。また、統計的な有意差はないけれども、傍観的行動は最も多く、大人との接触は最も少ない傾向にあった。これらの結果は予想(3)を一部支持するものといえる。しかし予想(3)に反して、仲間への肯定的働きかけは人気児群に次いで多かった。また、仲間遊び時間も平均児群よりもやや少ない程度であった。これらの結果を見る限り、無視児群の相互作用は基本的に平均児群と大差なく、仲間に対して肯定的な働きかけをすることもあり、仲間と活動を共にしていることが分かる。しかし、仲間と共に活動していても、仲間との相互作用は消極的であり、仲間との遊びは一時的になりやすく、すぐに一人遊びや傍観的行動に戻りやすいのではないかと考えられる。無視児群は特に何もしていない一人遊び（非従事）を多く示すことから、仲間との相互作用を発展させたり持続させる遊びを学習する機会や社会的スキルを身につける機会に乏しいのではなからうか。もしそうだとすれば、無視児群では仲間との相互作用を量的に増加させるだけでなく、遊びのレパートリーを広げたり、遊び方の方法を習得させる援助が必要であると考えられる。

要 約

本研究では、保育園児27名を対象にして写真ソシオメトリック指名法を実施し、その結果に基づいて各幼児の仲間内地位を決定し、4つの地位群に分類した。それと同時に、自由遊び場面における彼らの仲間相互作用をビデオ集録し、これら4群間でその結果を比較した。観察は幼児1人当たり合計20分間行われた。34の観察カテゴリーを使用して、各幼児の仲間相互作用行動を分類し、それぞれのカテゴリーごとに反応時間と反応回数を集計した。主な結果は次のとおりであった。

(1)人気児群は仲間への肯定的働きかけや仲間遊びが4群中で最も多かった。(2)拒否児群は否定的・攻撃的な行動を示しやすいことを実証できなかった。しかし、拒否児群は4群中で仲間遊びが最も少なく、平行遊び、一人遊び（従事）および大人との接触が最も多かった。(3)無視児群は

一人遊び（非従事）や傍観的行動が4群中最も多く、仲間遊びや大人との接触が少ない傾向にあった。

本研究では各地位群の人数が少なく、地位群間差は顕著でなかったけれども、人気児、拒否児、無視児の3群は観察測度においてもそれぞれ異なる特徴を示した。その点で、本研究は従来の相関分析研究を一步前進させるものといえる。しかし、短期間の観察や一定の観察時間を設定した観察方法では、仲間から拒否されやすい拒否児の否定的行動をとらえにくいことが分かった。今後の研究では、否定的行動に焦点を当てた継続観察を実施するとか、質的側面をとらえる評定尺度や観察測度を開発する必要があると示唆された。

引用文献

- Asher, S. R., & Coie, J. D. (Eds.) 1990 *Peer rejection in childhood*. New York:Cambridge University Press.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Goldman, J. A., Corsini, D. A., & deUrioste, R. 1980 Implications of positive and negative sociometric status for assessing the social competence of young children. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 1, 209-220.
- Greenwood, C. R., Walker, H. M., Todd, N. M., & Hops, H. 1979 Selecting a cost-effective screening measure for the assessment of preschool social withdrawal. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 12, 639-652.
- Gresham, F. M., & Nagle, R. J. 1980 Social skills training with children: Responsiveness to modeling and coaching as a function of peer orientation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 48, 718-729.
- Hartup, W. W., Glazer, J. A., & Charlesworth, R. 1967 Peer reinforcement and sociometric status. *Child Development*, 38, 1017-1024.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2, pp. 251-297. Greenwich: JAI Press.
- Krantz, M. 1982 Sociometric awareness, social participation, and perceived popularity in preschool children. *Child Development*, 53, 376-379.
- LaGreca, A. M., & Stark, P. 1986 Naturalistic observations of children's social behavior. In P. S. Strain, M. J. Guralnick, & H. M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. pp. 181-213. New York: Academic Press.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント教育心理学研究 第41巻, 152-160.
- 前田健一・高橋珠紀 1993 孤立しやすい幼児の社会的スキル訓練研究 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第40巻, 第1号, 47-59.
- Masters, J. C., & Furman, W. 1981 Popularity, individual friendship selection, and specific peer interaction among children. *Developmental Psychology*, 17, 344-350.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.
- Parten, M. B. 1932 Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269.
- Quay, L. C., & Jarrett, O. S. 1984 Predictors of social acceptance in preschool children. *Developmental Psychology*, 20, 793-796.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993a 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練-社会的孤立行動の修正- 行動療法研究, 19, 1-12.

幼児の仲間相互作用に関する観察研究

佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1993b 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練—コーチング法の使用と訓練の一般化性— 行動療法研究, 19, 13-27.

Vaughn, B. E., & Waters, E. 1981 Attention structure, sociometric status, and dominance: Interrelations, behavioral correlates, and relationships to social competence. *Developmental Psychology*, 17, 275-288.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました味生保育園の先生方並びに園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては石川奈緒美さん、高橋珠紀さん、谷口礼子さん、日野亜紀さん、松永佳代子さん、森山人美さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。